



横浜 2020年度

教師国内研修

実施報告書&ワークショップ集



多文化共生

～困難を豊かさに変えるプロセス～

独立行政法人国際協力機構
横浜センター(JICA横浜)

目 次

研修概要	4
参加者一覧	6
研修参加の動機	7
研修の軌跡	8
あなたにとって多文化共生とは?	10
日系人・日本人移住者から学んだこと	12
子どもたちに伝えたい!(多文化共生について)	16
教員に伝えたい!(多文化共生について)	18
Work Shop	21
キャンプに行こう!!	24
YOKOSO JAPAN	37
教員に伝えたい!(ワークショップづくり、実践などについて)	50
Let's 体で表現!	52
本研修参加前と後のご自身の変化	58
本研修からの最大の収穫は?	60
本研修に参加した感想	62
授業実践を経て、学習者(児童・生徒)の変化、反応	64

※この報告書に掲載されている意見は、本研修参加者によるものであり、JICA を代表するものではありません。
※参加者の所属等は、2020 年度のものであります。

研 修 概 要

教師国内研修とは

教師国内研修は、多文化共生～困難を豊かさに変えるプロセス～をテーマとして、オンライン講義、インタビュー、ワークショップ、フィールドワークを実施し、その経験を国際理解教育・開発教育の実践に役立てていただくための研修プログラムです。

(「教師海外研修」の代替え研修として実施いたしました)

研修概要

2020年8月～2021年3月の研修期間の中で、以下プログラムを実施しました。

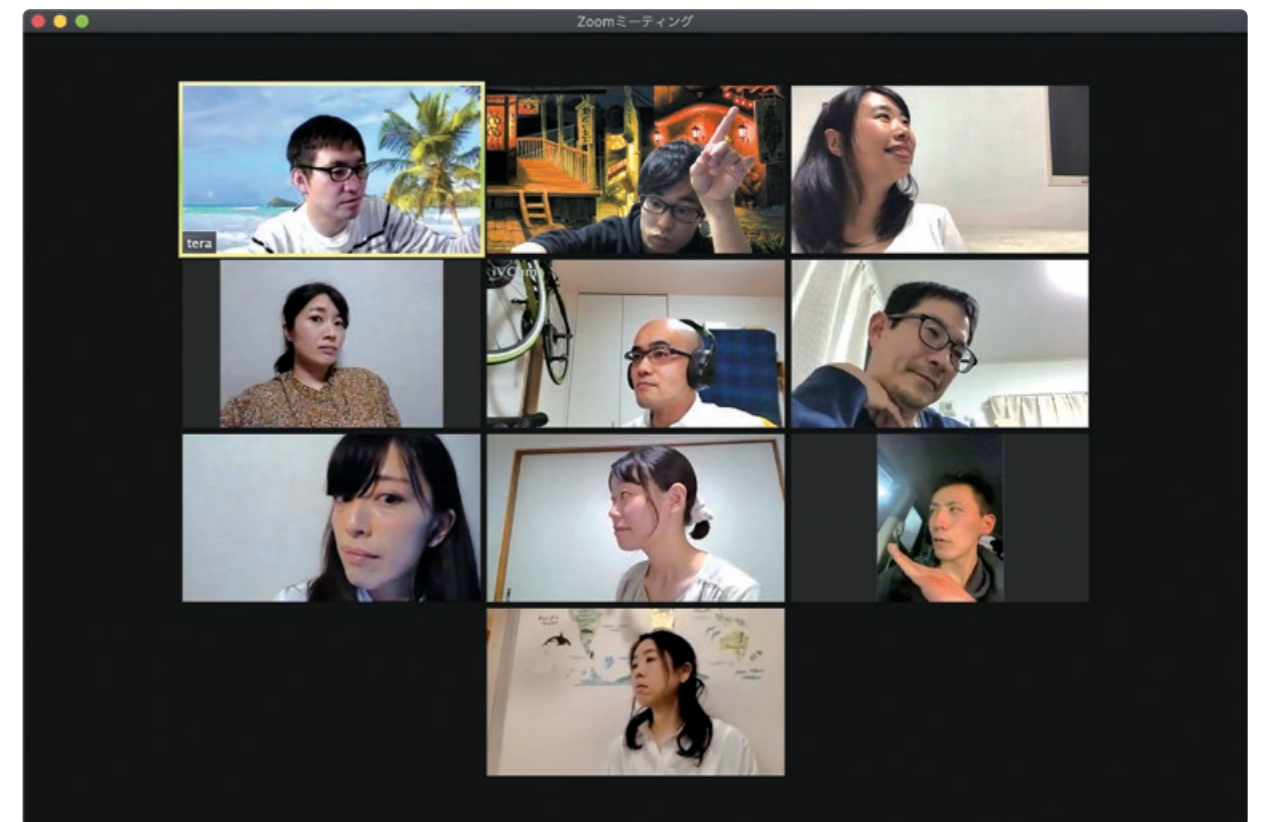
オンライン講座	<ul style="list-style-type: none">国際理解教育・開発教育の概要SDGsの概要
対面講座	<ul style="list-style-type: none">海外移住資料館見学海外移住の歴史的背景／移住当時の暮らし
Web 交流	<ul style="list-style-type: none">日本人移住者・日系人の暮らし在日外国人の抱えている困難支援の取り組みと実態
ワークショップ体験	<ul style="list-style-type: none">ワークショップの体験素材の集め方のヒント
フィールドワーク	<ul style="list-style-type: none">国内の日系人(外国人)コミュニティへの訪問(直面する課題、地域の取り組み、学校との連携など)
ワークショップ作成	<ul style="list-style-type: none">研修で得た知識を活用し、ワークショップ作成

学びの内容

- ◆国際理解教育 開発教育の理論
- ◆日本人移住者の歴史 **キーワード**：開拓、助け合い、信頼、差別、共生、地域 など
- ◆日系人の現状 **キーワード**：デカセギ、言語、子どもたちの教育、アイデンティティ など
- ◆SDGsの概要
- ◆情報収集力・分析力
- ◆思考力・応用力
- ◆課題設定力
- ◆ワークショップ・授業案作成力
- ◆ファシリテーションスキル
- ◆国際理解教育／開発教育の様々な手法
- ◆SDGsを学校で実践する手法

研修のゴール

誰ひとり取り残さない持続可能な社会へ向けて、日本から海外に渡った日本人移住者の歴史や、海外から日本に戻ってきた人々の暮らしに触れることを通して、多文化共生について理解を深めていただきます。研修で得た知識や経験をもとに、「持続可能な社会」「誰ひとり取り残さない」をテーマとした参加型学習教材(ワークショップ)作成を研修のゴールとします。



Zoomミーティング [撮影：2020年度教師国内研修参加者]

参加者一覧

(五十音順)

氏名	学校名	学年／担当教科
秋山 尚子 (あきやま なおこ)	 横浜市立桜丘高等学校	学年外／英語、国際担当
岩藤 仁美 (いわふじ ひとみ)	 井土ヶ谷小学校	国際教室
梶 奈穂子 (かじ なおこ)	 横浜創学館高等学校	1年／英語
兼岡 里衣 (かねおか りえ)	 藤沢市立高浜中学校	1年／社会科
佐々木 明 (ささき あきら)	 横浜市立庄戸小学校	6年
武士 勝広 (たけし かつひろ)	 横浜市立梅林小学校	5年英語／国際教室
寺鍛冶 尚紀 (てらかじ なおき)	 神奈川県立茅ヶ崎北陵高等学校	2年／英語
中川 飛鳥 (なかがわ あすか)	 神奈川県立麻生高等学校	2年／英語
中塚 圭二郎 (なかつか けいじろう)	 神奈川県立横須賀大津高等学校	2年／英語
藤井 智矩 (ふじい ともり)	 横浜市立新田小学校	6年

(所属等は2021年3月現在)

研修参加の動機

本研修参加の動機
<p>これまで、グローバルシティズンシップ育成の視点から国際交流プログラムや国際理解教育の意義を考えてきました。しかし、様々な出来事や人に出会い、自分自身の未熟さや見えていない世界を感じるようになりました。そのため、この研修で新しいことを学び吸収することで、自分とは何かを再考し、今後も「私たちが生きる世界」について生徒と共に考え行動する教員になりたいと考えました。</p>
<p>本校国際教室には、様々な国の児童が在籍しています。そのため、本研修に参加することで、日系人などの異なる文化の中で生きてきた方の経験を聞いて議論することを通して、児童がより良く生活を送ることに繋がると考えました。また、私自身海外に住んだ経験があり、「国際理解教育」に強い関心を持っていました。本研修に参加する先生方や JICA 担当職員の方々と意見交換を行い、国際理解教育について更に知見を広めたいと感じました。</p>
<p>多文化共生、SDGs、国際理解教育に興味があり本研修に参加しから勉強したいと思いました。私は高校で英語を教えています。英文法や単語を多く勉強して、英語を話したり読めるようになることは楽しいですが、その先には海外の方との交流や自分の気持ちを伝えるコミュニケーションが待っています。生徒たちが英語を学ぶその先にあることを意識していけるような指導がしたいと考え、本研修に参加させていただきました。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーションスキルの習得：生徒が社会的な課題を「ジブンゴト」として捉えて仲間と共にワクワクしながら課題解決に向かっていく授業をつくりたいです。 ・SDGsを学校で実践する手法の学習：さまざまな教員を巻き込み、チームでESDに取り組みたいです。
<p>もともと教師海外研修の存在は知っており、また学生時代から国際理解教育や開発教育のワークショップや実践に携わってきました。今年度、横浜市主催の別の海外研修に参加をする予定でしたが、中止となりました。それと同時に今回の研修の存在を知り、海外に行つたことのない自分にとっては、国内でできる研修は私にぴったりでした。そこで、迷わず参加することに決めました。</p>
<p>本校に異動し、国際教室担当になり、経験がなく取り組むことになりました。本校は外国籍児童が意外と多くいると知りました。横浜市の小学校全体として増加しています。日本語の教授法だけでなく、広い国際理解力、歴史的背景や理論を求められると考えました。「多文化共生」「国際理解教育」の学びを経験し活かすことで、児童と豊かな関わり合いができるようにできると考えました。</p>
<p>私がこの研修に参加した一番の動機は、「生徒にきっと、世界で起きていることに目を向けてほしい」という思いからでした。高校の英語教育は、現状どうしても受験で結果を出すことに意識が向きがちです。しかし、国際理解・異文化理解の意識をもった「地球市民」を1人でも多く輩出することこそ、英語教育の一番の目的だと考えます。研修で学んだ内容を実践に活かして、生徒にきっとグローバルな視野を持ってほしいと思いました。</p>
<p>私は、昨年シェアハウスで様々な国籍の方と暮らしていました。コロナの給付金を申請したくても書類が全て日本語で煩雑なこと、携帯電話契約でさえも外国の方は審査が通りにくいことなど、外国籍の方々が困っている現実を肌で感じました。普段暮らしているだけだと気づかないだけで、ニュースで見えるようなことが実は身近に起こっているんだとその時初めて気づきました。国際的な諸問題を「ジブンゴト」にする一歩として、実際に対話や交流といった貴重な経験ができるこの研修に応募しました。</p>
<p>横須賀地区は米軍や自衛隊の施設が多く、多様な背景を持った児童生徒が集まりやすい地域です。クラスに外国につながる生徒がいるのは当たり前前々となっています。文化差による行き違いや、困難を抱える生徒を見て、多文化共生のことを差し迫った課題としてとらえるようになりました。この多様性がある環境を教育に活かすことができないか、実際に生徒の生活を変容させる授業をしたい、と考えて応募しました。</p>
<p>国際理解教育やSDGsのさらなる充実です。本校では、積極的に質問をしたり外国人講師と一緒に英語を話したりして、外国についてさらに学びを深めようとする姿が見られるようになってきました。反面、他人事になっている児童も少なくありません。本研修を通し外国についてよりグローバルな視点をもちたいと考えました。SDGsに関しては、委員会活動で意識しながら進めていくために学ぶ必要があると考えました。</p>

研修の軌跡

第1回目：8月2日(日)

本年度の研修参加者10名がオンラインで初対面。

● チームビルディング

チームビルディングを目的に、自己紹介やチームのゴール、そしてチームとしてどのように研修を進めるかについて共有。

これからの研修において、疑問・不思議に思った「モヤモヤ」を大切に、それをゴールとする教材づくりへ活かして欲しいこと、また、参加者10名とスタッフ全員のチームとして、互いに気づかないことを気づかせ合いながら化学反応を起こすようなチームを目指そう、と教師国内研修を通しての心構えを確認しました。



● 身近な「困難」

身近に感じる困難や、その困難がどのように豊かさにつながっていくと良いかといったストーリーを共有。例えば、クラスにきた留学生が孤立しそうになってしまっているという実際に起こっている困難に対して、クラス内で役割を決めて学校案内をする「バディプログラム」や交流を通して、お互いの文化や留学することの大変さを共有し、共にお互いを理解し、成長することができたという創作ストーリーなどを共有しました。

第2回目：8月23日(日)

● SDGs 講義

拓殖大学の石川一喜准教授をお迎えし、SDGsについてのレクチャーをしていただきました。

日本のSDGsの達成状況と自分の認識のズレに気づいたり、SDGsについて子どもたちに学習してもらう時には、SDGsを教えるのではなく、結果的にSDGsにつながるような授業を展開すべきことなど、多くを学びました。



● 【学校現場でのSDGsの実践事例】

学校現場でのSDGsの実践事例について、事前に調べてきたものを共有。また、実践者や学習者に質問してみたいこと、および自分ならどのようにアレンジして実践するかについて意見交換を行いました。



第3回目：9月6日(日)

● 多文化共生について

各自が考える「多文化共生」の理想の姿と、その理想に対する児童生徒の現状を共有。理想イメージとして「ありのままを受け止める」「40名全員に個性がありそれを認め合える」「自分だけを当たり前と考えない」などが、そして現状として「人と比べて上下(優劣)を気にする」「多文化共生を体験する機会が少ない」「自分と仲の良い限られた交友関係を築く生徒が多い」などが挙がりました。

● 海外移住資料館見学

JICA 横浜施設内の海外移住資料館を見学。事前に考えてきた「日系人、日本人移住者に関して知りたいことや疑問」の回答になるものを探求しました。移住した背景、移住先での待遇、地域や教育のありかたなどを学びました。

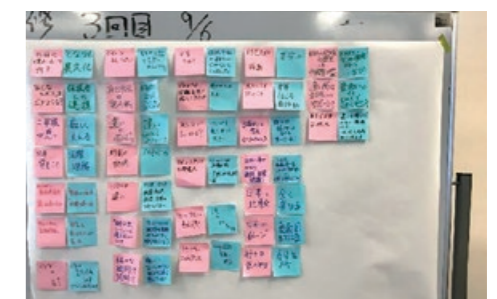
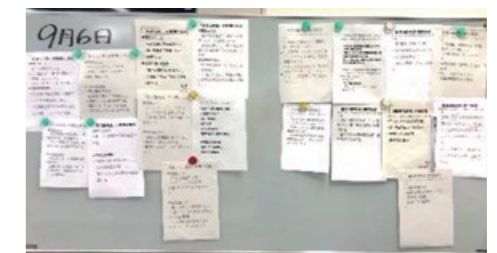


● 当事者の声

日系人2名をお迎えしてインタビュー。当事者である方々からのお話を直接聞くことができ、ゲスト2名がどのように困難を乗り越えてきたのかについて理解を深め、また、実際に学校現場で必要な支援や保護者への支援などについて多くの気づきを得ました。

● 国際理解教育／開発教育

知りたいことや深めたいこと、または困っていることなどを共有。例えば「教科との連携・関連付け」「どう当事者意識を持たせるのか」「様々な手法・実践例が知りたい」などがあり、今後の研修で習得すべき具体的なトピックを整理しました。



研修を終えた
参加者10名に
聞いてみました

あなたにとって多文化共生とは？

秋山 尚子 (あきやま なおこ)

多文化共生について考え続け、行動して、自分のありのままの日々の生活とつなげていくことです。そのあり方が「多文化共生」なのではないかと思えます。

岩藤 仁美 (いわふじ ひとみ)

使っている言語、食べている物、着ているもの、考え方、性格などの違いがそれぞれある中で、お互いを認め合い、気持ちよく生きていくことだと思います。

梶 奈穂子 (かじ なおこ)

人がそれぞれに違うこと。そしてその違う一人一人がその違いを楽しみ、互いの考えや文化を尊重しあえる環境。

兼岡 里衣 (かねおか りえ)

- ・一人ひとりが自分自身を誇りに思える＝「豊かさ」
- ・人に優しい目を向けて知ろうとする
- ・違いを恐れず、楽しめる
- ・多文化がふれあう
- ・笑顔！

佐々木 明 (ささき あきら)

「多文化共生」を考える時、いつもどこか遠い国とか、広い世界をイメージすることが多いですが、私は、いつも隣や身近にいる人と仲良くできるかということが重要だと考えています。

武士 勝広 (たけし かつひろ)

職場にも文化があり、児童も異なる文化を身につけています。隣の人は違います。だから良いのです。私も同じです。共に、価値があり、違いを尊重し合い、認め合えるようにすることです。

寺鍛冶 尚紀 (てらかじ なおき)

「自分の隣にいる人々との違いを楽しむ」ことです。他国の人・民族に限らず、同じ社会に属する人々の多様な価値観や好みをそのまま受け入れ認め合うことで、豊かな社会・個人の幸せが実現すると思います。

中川 飛鳥 (なかがわ あすか)

「みんなそれぞれが違う人であること」をお互いが理解していること。

中塚 圭二郎 (なかつか けいじろう)

自分の中に自分の大切なものを見つけること。相手の中に相手の大切なものを見つけること。自分も相手もとても複雑なアイデンティティの成り立ちをしていることに気付くこと。

藤井 智矩 (ふじい ともり)

「となりにいる人と笑顔で過ごすこと」だと感じます。多文化とは海外の方々と共生することだと考えていました。しかし、「自分の隣にいる人も多文化である」という新たな考えを得たことがとても大きな理由です。

第4回目：10月4日(日)

● 海外移住・日系人の歴史・現在

海外日系人協会の小嶋茂氏を講師にお迎えし、「日本人移民の歴史と日系人の現在」の講義。「あなたが知っている日系人は誰？」というお話から、日本人海外移住の歴史、戦後復興支援として日系人が始めたララ物資についてなど、前回の研修での海外移住資料館の見学だけでは知ることのできない情報に加え、小嶋氏が海外移住や日系人の研究に関わる想いなども交えて熱く語っていただきました。



● 視点を定める

今回の鶴見地区(注1)フィールドワークに向けて、フィールドワークで出会う方々に「聞いてみたいこと」を整理するグループワーク。

「自分のアイデンティティはどこにあるか」「自分たちの文化・コミュニティの良いところや大切にしていることはなにか」「日本の社会・学校・企業に対する要望は?」「外国につながりを持つ児童の保護者としてあってよかったサポートは何か」などが挙がりました。アドバイザーのかながわ開発教育センター(K-DEC)の小野氏からは、インタビューをするときには、目的をもってインタビューすると、聞きたい情報が得られるとの助言をいただきました。

(注1) 鶴見地区：在日朝鮮人、南米から移住して来られた日系人や、沖縄から移住して来られた方々など、異なる背景を持つ多くの方が住んでいる地区。また「多文化共生のまちづくり」を行っている。

(鶴見区ホームページ：<https://www.city.yokohama.lg.jp/tsurumi/shokai/gaiyo/>)

第5回目：10月25日(日)

● フィールドワーク

鶴見地区へのフィールドワーク。NPO 法人 ABC ジャパン(注2)の安富祖樹里氏より、子どもの教育保障、定住外国人の自立、多文化共生の面から、ABC ジャパンの活動についてご紹介いただきました。

続いて、鶴見の街を散策し、鶴見地区仲通りにある沖縄物産店に立ち寄り「多文化」を実感した後、同じ通りにあるブラジル食品の商店兼レストラン「ユリショップ」にて昼食をとりながら、日系移住者である店主のユリさんにインタビュー形式にてお話を伺いました。



(注2) NPO 法人 ABC ジャパン：<https://www.abcjapan.org/>

その後、公益財団法人横浜市国際交流協会鶴見国際交流ラウンジ（注3）を訪問し、館長補佐の沼尾実氏よりお話をお伺いしました。鶴見国際交流ラウンジの活動と在日朝鮮人、南米から移住して来られた日系人や、沖縄から移住して来られた方々など、異なる背景を持つ多くの方が住んでいる地区であること、またその中で「多文化共生のまちづくり」をどのように進めているのかを具体的に知ることができました。



（注3）鶴見国際交流ラウンジ：<http://tsurumilounge.com/>

● フォトランゲージ

フォトランゲージの模擬授業を行いました。フィールドワークで各グループが撮影した1枚の写真を使い、子どもたちにどのようなことを問いかけて、何を引き出したいのかを5分程度で発表しました。



研修を終えた
参加者10名に
聞いてみました

日系人・日本人移住者から学んだこと

秋山 尚子（あきやま なおこ）

移住者と聞くと、以前は「日本に住んでいる外国人」もしくは「外国に住んでいる日本人」というイメージのみでしたが、その背景にあるものや移住者における側面を知るきっかけとなりました。特に、移住者と教員の両方が抱える教育における具体的な問題については深く考えさせられました。誰もが学びやすい環境作りという事の「誰もが」の中に移住者の存在も念頭に置いて教員全体で行動していく必要があると思いました。

岩藤 仁美（いわふじ ひとみ）

「自分は、ダブルだ。」という言葉がありました。この言葉には、自分には日本人としても、ブラジル人としての文化も入っているという意味があります。自分自身の背景を知り、それを肯定的に捉え、受け入れることで、自分の文化に誇りを持つことができると感じました。また、「ふきんを持ってきてと言われて分からない、口座に振り込む意味が分からなかった。」という言葉から、私達が「当たり前」と思っていることに疑問を持つことが、相手の立場になって考えることに繋がると感じました。

梶 奈穂子（かじ なおこ）

アイデンティティの確立です。ブラジルの日系人の方のお話で、自分がブラジル人でも日本人でもないと思ったことがあると聞きました。自分が何者であるかが分からないときは不安定な気持ちでしたが、自分はブラジルの日系人だと言い切れるようになったとき、自信が持てたということでした。そういうことは日系人の方だけでなく、自分が人と違うと思えば不安な気持ちを持っているすべての人に言えることなのではないかと考えました。

寺鍛冶 尚紀（てらかじ なおき）

自分のアイデンティティは「ダブル」だというエメリンさんの発言が印象的でした。子どもの頃に日本に移住されてきたとはいえ、確実にアイデンティティの半分が母国にあることが興味深く、どの年齢で日本にくるのが最も影響するのかなと考えました。また、日本人にとって当たり前なことが当たり前ではないということが、移住者のお話からよくわかりました。

兼岡 里衣（かねおか りえ）

昔、日本人移住者は移住して最初の50年は差別・偏見の歴史で苦労しました。現在、日本に働きに来る日系人が増え、昔、海外で起こったようなことが日本で起こってきています。「引っ越しの挨拶にお菓子を持って行って受け取ってもらえなかった」という話を聞きました。知らないことに対する怖さがあるのでお互いの理解が進むことが大切です。一方だけが合わせるのではなく、お互いが知ろうという気持ちを持ちたいです。

中川 飛鳥（なかがわ あすか）

いままで動機にもある様に日本に住む移住者の方々は「困難」を抱えているのではないかと信じていました。しかし、対話するなかで、意外と困っていない部分もあり、そもそも「困っている」という先入観から話を伺ってしまっている偏った見方をした「自分自身」に気付きました。

実際、移住者の方々の話のなかで保護者用プリントに書かれている「持ち物」の「ふきん」が何かかわからない、生徒が読んで保護者の方へプリントの内容を説明しているのに集金のお知らせが全く意味が分からなかった、という話が印象的でした。

このことから、日頃から自分自身の「当たり前」を信じるのではなく、「対話」の中で相手が何を求めているのか考える事が重要だと感じました。

佐々木 明（ささき あきら）

自分が30数年間生きてきたなかで、まったく意識したことのない考えに出会いました。そもそも「自分が何人なのか」「自分はこれから何人として生きていくのか」で迷うことなど考え方がありません。それでも移住者の方々に共通していたことは、「自分の信念をもってしっかりと日本で生きている」ということです。

中塚 圭二郎（なかつか けいじろう）

見方や言語について、どちらの文化からも拒絶される経験は自分のアイデンティティの確立に大きなハードルだったのだと思います。足元の地面が崩れていくような、想像もできないことだろうと思いました。そこから「自分は両方につながるんだ」という風に強く振り切れるまで、本人や周りには本当に辛抱強くもがき続けたんだと気づかされました。

武士 勝広（たけし かつひろ）

海外移住資料館を見学して、遠い祖国を思う日本人移住者が戦後何も無い苦しい時に、日本からのララ物資で支えられてきたことを知り、その思いの深さに心が熱くなりました。また、六世が誕生したハワイのビッグファミリーの集合写真は本当に幸せそうに見えました。海外で日本を故郷と思い、二つの文化を大切にされている移住者の姿を学ぶことができました。

日系人の方の苦労や経験、思いの中に、「誰かの支えがあった。心の支え。」などがあり、そばにいる人の存在の大きさを感じました。

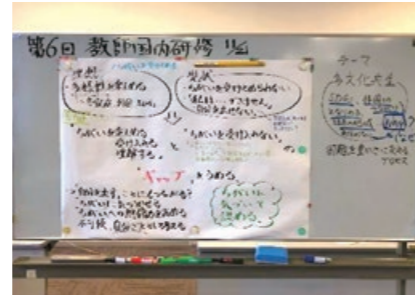
藤井 智矩（ふじい ともり）

「当たり前が違うこと」について身をもって学んだことです。実際にインタビューしたり、話を聞いてみたりすると、みなさんの考え方や悩みを知ると同時に自分に誇りをもっていることに感銘を受けました。日本語の読み書き、生活の仕方、さまざまなところで起こる「当り前の違い」をより身近に感じたことで、だれもが豊かに暮らすためにどんなことが必要かをより具体化して考えるきっかけになりました。

第6回目：11月21日(土)

● あなたは誰ですか？

「あなたは誰ですか？」の問いに対する回答を「私は〇〇です」という形で3つずつ共有。単純な問いですが、自分が何者かを考えるきっかけになることもあり、一方で「私は〇〇です。でも誰も認めてくれませんが、または、嫌ですが、」などの自身のアイデンティティを抱えている人がいることを想像するヒントにもなる問いかけです。



● ワークショップ体験

作成のヒントのためにまずは体験ワークショップとふりかえりの組み合わせによって、学習者の気づきを引き出すイメージが沸きました。



● ワークショップ案

「多文化共生～困難を豊かさに変えるプロセス～」という本研修のテーマに沿って、いよいよワークショップ案の作成。

まずは、「Why(多文化共生を伝える意義)」と、「What(何を引き出して何に気づかせたいのか)」についてじっくりと話し合いました。

第7回目：12月6日(日)

● ワークショップづくり

アドバイザーのかながわ開発教育センター(K-DEC)の小野氏から提示いただいたワークショップ作成時の5つのポイント「単純化、モノ化、細分化、言語化、見える化」の再確認。

3つのグループに分かれ、多様な視点から出されるアイデアでワークショップ案が深まったり、シンプルなものに変化させたりなど、楽しみながらかなり入り込みました！



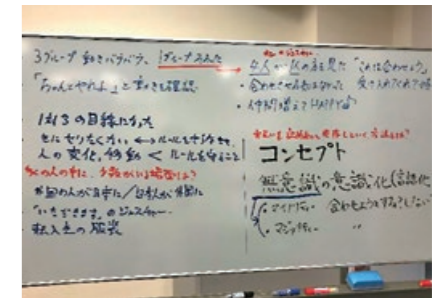
第8回目：2月7日(日)

● ワークショップ実演 フィードバック会

アドバイザーとしてご協力いただいているかながわ開発教育センター(K-DEC)の小野行雄氏、木下理仁氏、第2回研修でSDGsの講義を担当して下さった拓殖大学の石川一喜氏、第3回研修で日系人当事者へのインタビューに応じて下さった Mahouri Miyazato 氏、昨年の教師海外研修の参加者5名をお招きし、作成した3つのワークショップの実演。



ワークショップを体験した皆様からのフィードバックをもとに、これからさらにブラッシュアップしていくことになります！ご協力いただいた皆様ありがとうございました！



子どもたちに伝えたい！ (多文化共生について)



秋山 尚子

ハッピーな地域、社会、世界は、自分たちで創るもの、と思っています。ギモンを持つ気持ち、ギモンを考えてみる勇氣、ギモンを声に出してみる行動、そんな自分を大切にしてほしいです。

岩藤 仁美

周りには、様々な人がいると思います。だから楽しいこともあれば、意見などが異なってぶつかって悩んだり困ったりすることがあると思います。その中で、よりよくみんなが安心して生活していくにはどうすればよいかに目を向けて、考えていくことが今後生きていく上で大事なことだと思います。

梶 奈穂子

皆さんは自分と違った趣味や習慣を持った人のことをどう思いますか。多文化共生は世界各国たくさんの文化があるという意味だけでなく、例えば皆さんのいる教室の中でスポーツが好きな人、本が好きな人、色々な人がいてみんなで楽しくやっけていけることという意味もあります。自分と同じような趣味の人たちだけではなく、色々な人と話をしてみたいです。自分の世界観を広げることにもつながり、とてもおもしろいですよ。

兼岡 里衣

- 違うのが当たり前、違って面白い、素晴らしい
- さあ、自分を表現しよう
- みんなが安心・安全に表現できるように人に対して優しい気持ちをもとう
- 多文化メガネをかけて、多文化を発見しよう
- 多文化とふれあおう(心は密○、三密×)
- みんなで笑顔の未来をつくろう

佐々木 明

今年は、社会的な影響を大きく受けることが多かった1年です。だからこそ、人との「つながり」を求めたり、再認識したりする機会が多かったと思います。「多文化共生」という少し硬い言葉も、「つながり」という面から考えれば、人と人とはどこかに必ず「つながり」があるということです。

武士 勝広

世界は、広く様々な人々が住んでいます。日本もその中の1つです。しかし、国籍、人種ではなく、一個人と考えればどうでしょう。それは、学校、教室でも同じです。皆が違いの中で、文化を形成しています。違いの良さを知り、お互いが認め合えるようになればよいですね。共に繋がり、支え合い、これからの未来を創っていきましょう。未来を豊かにするヒントになると思います。

寺鍛冶 尚紀

教室にいる40人は、皆が同じ価値観や考えを持っているとは限りません。むしろ、1人1人はそれぞれ違うと言った方がいいです。それらをそのまま受け取った方がいいでしょうか。それとも、集団として1つの同じ考えに揃えた方がいいでしょうか。全員が同じ「行動」を取ることはできても、「心」までは同じにできません。相手の心をよく知り、自分の心もよく知りましょう。それが「多文化共生」です。

中川 飛鳥

- みんなだれでも「ひとりの人間・ひとりの友達」
多文化といっても、バックグラウンドの違いだけではなく、隣にいる人も異なる文化をもっているということ。
- 「対話する」ことの重要性
本当に思っている事は「対話」しないとわからない。違うことや知らないことはこわいものになりえる。話してみると同じこと、違うこと、それぞれの理由があるかもしれない。思い込みでなく、「対話」することが大切。

中塚 圭二郎

自分の特徴を「多くの人と同じこと」から始めて書き出してみよう。だんだん当てはまる人を小さくして「家族と同じこと」や「自分だけのこと」まで書いてみよう。それらの自分の特徴のうちで、一番「自分らしさ」を感じるのはどれだろう。実は人と同じことよりも、自分しか当てはまらないことに自分らしさを感じないだろうか。他の人と違うことを嬉しく思う。他の人が持つ、自分と違う所を探してみよう。

藤井 智矩

「当たり前が違う」ことを知った上で今ある環境、これから出会う人たちと向き合ひましょう。「考え方が全く同じ」ということはまずありません。むしろこれからはたくさんの違う考えをもった人達と出会うでしょう。もちろん、冒頭で伝えたことを実行することは簡単ではありません。しかし、この気持ちをもつことが大切なのです。あなたの「相手を思う気持ち」と「自分の思い」を大切にすることが、一つのきっかけになるはずです。

教員に伝えたい！ (多文化共生について)



秋山 尚子



「多文化共生」と言えば、近いようで、遠い言葉かもしれません。困ったら、まずJICAをのぞいてみてはいかがでしょうか。新しい発見があると思います。そして、気が付いたら、多文化共生に繋がっているなあ、と思うことがあればいいのではないかと思います。この「多文化共生」の言葉だけが一人で歩いて行ってしまわないように、自分の胸に置いて、周囲の人と共生していけたらいいなと思います。

岩藤 仁美



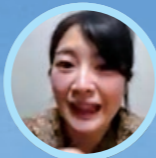
外国籍児童や外国につながる児童（海外に自分のルーツがあり、多様な言語、文化、価値観、慣習などの中で育ってきた児童）が増えています。日本の伝統や文化、生活習慣に馴染みがない場合があるので、学校で配慮が必要になると思います。例えば、学校から児童への連絡が伝わっているか、学校制度や学校文化を理解しているかです。それらを確認しながら、安心できる場作りをしていきたいです。

梶 奈穂子



様々なルーツを持つたくさんの児童・生徒を扱う学校という場所では、人間関係のトラブルなども珍しくはないかと思います。私も自分自身が掲げる理想と現実のギャップに悩まされることもあります。多文化共生をテーマとして生徒たちに考えさせることがそのギャップを埋めることにつながればと思い、ワークショップなど生徒たちに伝えられる方法をこれからも模索していきたいと思っています。

兼岡 里衣



- 先生も多文化メガネをかけよう
- 型にはめない(あれはだめ、これもだめ、本当?) (〇〇らしく×)
- 多文化を発見する、発揮する、ふれあう機会をつくろう
- 学級経営で、安心・安全な環境づくりをしよう

佐々木 明



職員室や教室、学校のなかにも、多文化共生は存在します。特に教員の方は、新しい学校に異動したり、他の学校に研修に行ったりすると、「自分だけ」とか「なんとなくやりにくいな」と不安や戸惑いを感じたりすることが多くあると思います。そんなときに、自分は孤独を感じるかもしれませんが、自分は今「多文化共生のなかにいる」と視点を変えることで新たな視野や視点が見られることと思います。

武士 勝広



「多文化共生」という言葉に対し、おそらく誰もが違う意見を持ち、様々に理解していると思います。正解、不正解はありません。その人が考え、思う、価値観があります。その人の生き方にはそれぞれの文化があります。できれば、各々の見方、考え方をもう少しだけ視野を広げたり、加えたりできればよいと思います。そのきっかけとしてワークショップを通して、多文化共生を考えてもらえれば嬉しいです。

寺鍛冶 尚紀



1つの職員室の中にも、実践歴や育てたい生徒像など、多様な価値観があります。また、生徒1人1人をとっても、将来に対する欲求や学習に向かう姿勢はそれぞれです。それらを十把一絡げにせず、型にはめず、1人1人と向き合ってみませんか。そして、一度は、ありのまま受け入れ認め合ってみましょう。職員室が、教室が、学校全体がもっと豊かになって楽しく毎日が過ごせますよ！

中川 飛鳥



• 「思い込み」でなく「対話」で児童・生徒たちと接する
教員として個人と関わる事が多い中で「この人はこういう人だ」と少しの情報から決めつけてしまう機会が多くある様に感じます。
そのなかでも、先入観から話をしたり、自分の思う答えに誘導するのではなく、児童生徒との「対話」の中から彼らの思いを引き出してほしいと思います。

中塚 圭二郎



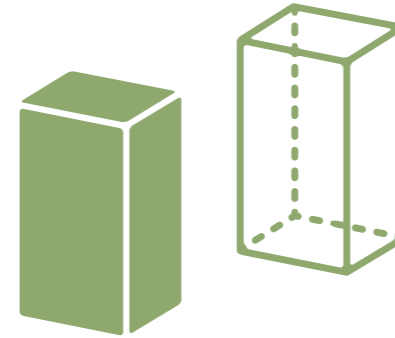
困っている児童生徒は多いのに、その困っていることがニーズとして見つかりにくいという問題の構造的な強さを感じました。日系人へのインタビューの中で「日本でうまくやれているのは、親・教師・友人の誰かの支えがあったから」という発言がありました。教育のプロとして卒業後10年たって振り返られる仕事をしたいなあと思いました。

藤井 智矩



今、必要なのはまず教員が「多文化共生」を学ぶことだと思います。私自身、この研修を受けるまでこの言葉の意味をはき違えていました。研修を進めていく中で自分自身にできることを本気で考え、もっと周りと一緒に多文化共生について考えたいと思いました。実際に、職場ではこの研修の内容について共有を図ったり、ワークを行ったりしました。教員が学ぶことで子どもの「笑顔」をさらに増やすことができると信じています。

Workshop



▶ P24

キャンプに行こう!!

ワークショップを通して学ぶ
「より良く生活していくために必要なこと」
とは

▶ P37

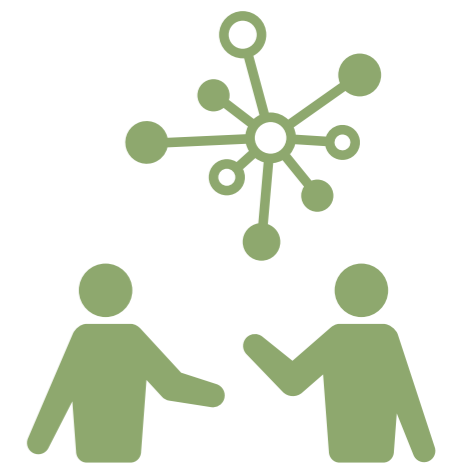
YOKOSO JAPAN



▶ P52

Let's 体で表現!

How can we live together?



ごあいさつ

本書を手にとっていただきありがとうございます。本書は、2020年度 JICA 横浜教師国内研修の参加者が、研修の一環として作成したワークショップ（参加型アクティビティ教材）を掲載しています。

本研修のテーマは「多文化共生～困難を豊かさに変えるプロセス～」です。本書に掲載しているワークショップは、事前研修で私たちが学んだこと、気づいたこと、または疑問に思ったことなどを基に作られたものです。

学校や地域で、多文化が共生する環境づくりのために活用していただけたら幸いです。この場をお借りして、ワークショップ作成にご助言、ご協力いただいた方々に感謝します。

理想とする「豊かさ」と現状の「困難」とのギャップ

● 背景

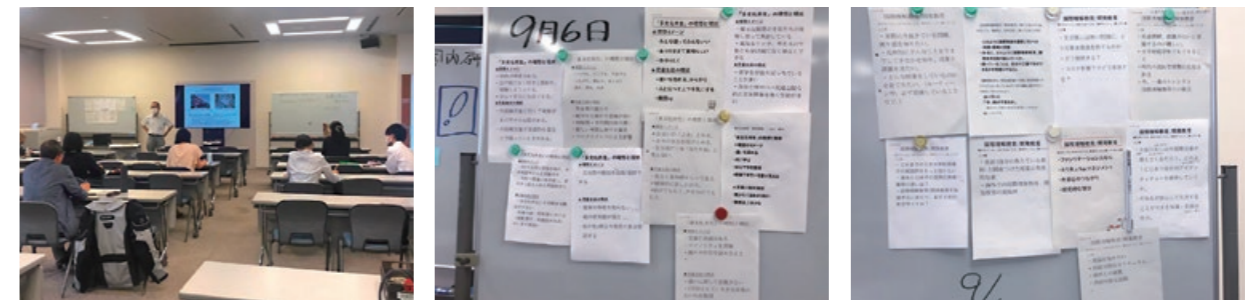
私たちは今回、「困難」と「豊かさ」を次のように定義しました。年齢や住む地域が近い児童・生徒たちが所属する学校では、かえって言葉や外見などの違いがわかりやすい形で目立ってしまいます。そのことを踏まえて、「人との違いを素直に認められないことや、自分が多数派にいることで少数派の意見が見えなくなる」ところが学校現場における「困難」であると定義しました。そして、「豊かさ」については、「個性の違いが認められ、お互いを受け入れられること」としました。

● 日系3世の方々のインタビューから ～『つながりかた』を考える～

本研修のプログラムの一つとして、ブラジル系日系3世の方々を主な対象として、インタビューをしました。その中で、以下のお話をお聞きしました。

- ・「豊かさ」とは、たくさんの人とつながっていることです。
- ・「自分が誰なのか」と自信をもって言えることが大切です。
- ・他人と違うことがコンプレックスになります。特別扱いをせず、平等に接することが大切です。
- ・人を「日系人」などのグループでくくることは、人の個性を覆ってしまい、本人らしさが伝わりません。

他にも、多くの方からの様々なお話を経て、私たちは「多文化共生の困難を乗り越えるためには、人との『つながりかた』に意識を向ける必要がある」との結論に至りました。自分たちが「当たり前」と思っていることを改めて丁寧に考え直すことで、多文化共生の実現に向けての大事な足掛かりにしていきたいと考えます。



私たちの目指すもの（ねらい）

Why：なぜこのワークショップをしたいのか

多文化共生を通して、「困難を豊かさに変えるプロセス」をつかんでほしい

What：何を引き出して、何に気づかせたいのか

多様性がある中で、たくさんの違いに気づき認めることができるようにする

多文化共生の理想についてそれぞれの教育現場で考えたとき、フィールドワーク先での様々な方のお話から、「多様性というのは決して国の違いだけにとどまらず、個人の違いでもある」ことに気づきました。

児童・生徒たちにも、人によって当たり前が違うということに気づき、人と『つながる』ときに、どのようなことに気をつければ良いのかを考えてもらいたいと思いました。

そこで、「共に毎日暮らしている近くの人たちのことを理解し、『つながりかた』を考えるきっかけにして欲しい」というねらいのもと、3つのワークショップを作成しました。

ワークショップを作るにあたって気をつけたこと

- ▶ 「単純化、モノ化、細分化、言語化、見える化」
誰もが思い描きやすい日常的な活動にすること。
- ▶ 「ビルド」「ビルド」でなく「スクラップ」アンド「ビルド」で
作り込みすぎず、行き詰まったときは計画を一からやりなおすこと。
- ▶ 常に **why, what** を考える
目的を見失わないように常に考え続けること。

本書の使い方

本書に掲載しているワークショップでは、指導者（ファシリテーター）の手助けをかりて、学習者・参加者が新しいことに気づいたり、新しい価値観に出会ったりすることをねらいとしています。

本書はコピーして使っていただいてもよいですし、JICA 横浜のホームページから印刷していただくこともできます。また、これらのワークショップを作成した私たちの実践の一部が、JICA 横浜のホームページに「2020年度 JICA 横浜教師国内研修」として掲載されています。各自の実践の工夫や児童生徒の反応、本書には掲載しきれなかったアレンジ版等、ぜひ参考してみてください。

2020年度 JICA 横浜 教師国内研修参加者一同



キャンプに行こう!!

～ワークショップを通して学ぶ「より良く生活していくために必要なこと」とは～

ワークショップのねらい

価値観や考えが異なる集団で生活する中でも心地よく生活するために、全員が納得できる話し合いのプロセス(方法)を学ぶ

概要

研修の中で日系人や日本人移住者の方々と交流をしました。その中で、一人ひとりの生きてきた背景によって考え方や価値観が異なり、同時に多様性が生まれることを実感しました。

しかし、話し合いの中では相手とぶつかったり、問題が起きたりします。今回は、そんな考え方や価値観が異なる集団の中で心地よく生活できるよう、合意形成に視点を絞ったワークを考えました。

- ◎ワークショップ形式で行う
- ◎キャラ設定を5つ用意しておき、自分に近いものを選ぶ
- ◎「班のみんなでキャンプに行く」という設定にして、いくつかのテーマについて、自分たちで話し合いながら、決めていく

※児童の実態に応じて、内容を変更しても良い。

教材内容

- ・役割カード、ふりかえりシート

所要時間	45分	準備するもの	キャンプ予定計画シート 役割カード ふりかえりシート
1グループの人数	4～5人		

進め方

■授業の流れ

導入	課題把握
話し合いのルール・場面設定の説明	<ul style="list-style-type: none"> ・1班をベースにして、役割を決めて実際に話し合う。 ・グループでキャンプに行くという設定で、全員が納得できるように話し合う。 例・服(例:お揃いの服か、自由か) <ul style="list-style-type: none"> ・食べるもの(例:パン、ご飯、麺) ・泊まる場所(例:テント、コテージ) ・自由時間(例:キャンプファイヤー、釣り) ※児童の実態に応じて、変更可。
キャラクター設定の提示	グループ内で話し合う際、自分のキャラクターに適するものを選ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> A 意思、責任感が強く真面目、負けず嫌い B 周りの意見に共感しやすい、内気 C 心配、慎重 D まとめ上手、博識、柔軟 E 優しい、心が広い、穏やか ※上記の設定は、生徒の実態やクラスの状況などに応じて使用する。

話し合いの開始～終了	
ターンごとに話し合いのふりかえりをする	それぞれの回にどのように決まったかを共有する。
ふりかえり	それぞれの回にどのように決まったかを共有する。

■実践例1)

教科:総合 対象:小学校6年生

導入	「今年は修学旅行に行けませんでした、今日はキャンプに行けることになりました!として考えてみたいことがいくつかあります。」
話し合いのルール・場面設定の説明	「班ごとに動くのですが、いくつか決めなければいけません。みんな、楽しいものにしたいですね!」 以下の4つのトピックについて、どちら(どれ)が良いかをグループで話し合ってもらおう <ol style="list-style-type: none"> 1 服(例:お揃いの服か、自由か) 2 食べるもの(例:パン、ご飯、麺) 3 自由時間(例:キャンプファイヤー、釣り)
キャラクター設定の提示	「では早速決めていきますが、みなさんには今からキャラクターを選んでもらいます。自分に一番近いものにしてもいいですし、やってみたいと思うキャラでもいいです。バラバラだとより良いですね。」 グループ内で話し合う際、以下のキャラクターに扮してもらおう <ul style="list-style-type: none"> A 意思、責任感が強く真面目、負けず嫌い B 周りの意見に共感しやすい、内気 C 心配、慎重 D まとめ上手、博識、柔軟 E 優しい、心が広い、穏やか ※上記の設定は、生徒の実態やクラスの状況などを配慮して、
話し合いの開始～終了	「話し合う時間は3分間です。1つ目、よーいスタート!」 机間巡視を行いながらどんな風に話し合いをしているかや、どんな意見になったか声かけをする。
ターンごとに話し合いのふりかえりをする	例1)どうだった?(班ごとに結果を聞いてみる。) →意見が決まった班、決まらなかった班の理由を聞いて、どうしたら良いのかをみんなで考える。
ふりかえり	話し合いを行って感じたことをまとめる。 「最初は多数決になってしまった。」 「お互いに我慢した。」 「選択肢が増えれば増えるほど決めることが難しかった。」 ※グループ内での共有、数名に聞いて全体で共有、ワークシートへの記入などをさせるとよい。

キャンプ予定計画

必ず決めてください

①服装

②食べ物

③自由時間

○役割カード

A

★役割★

- ①誰かとおそろいのものを付けることが好き。連帯感が強い。
- ②ご飯がいい。
- ③キャンプファイヤー

★セリフの例★

- ①「人ごみの中でみんながはぐれても分かるように同じジャージを着たい!」
- ②「キャンプで食べるなら、ご飯と合うカレーがいい!」「キャンプらしい、飯盒炊飯をしたい!」
- ③「キャンプファイヤー楽しかったじゃん!」

B

★役割★

- ①自分に合った服装をしたい。オリジナルが好き。
- ②ご飯派。
- ③つり

★セリフの例★

- ①「自分の好きな服でキャンプをしたいな。」
- ②「飯ごう炊飯で、みんなで作ったご飯はおいしいだろうな。」
- ③「川が近くにあるんだからつりをしたい!」

C

★役割★

- ①自分の好きな服で出かけたたい。
- ②パン派。
- ③散歩

★セリフの例★

- ①「自分の好きな服で出かけたたいな。」
- ②「パンをみんなで作ったら、楽しいと思う。」
- ③「なかなか都会だと自然を感じる機会が少ないから散歩しようよ!」

D

★役割★
①最近新しく買ったジャージを着ていきたい。
②パン派。
③川遊び

★セリフの例★
①「新しく買ったジャージを着ていきたい。そうしたら、気持ちもわくわくだよ。」
②「パンをみんなでこねて作りたい。」「窯があるみたいだから、ピザにしようよ。」
③「せっかく川があるんだからみんなで泳いだり、遊んだりしたい！」

E

★役割★
①ジャージ。
②パン派。
③なんでもよい

★セリフの例★
①「アウトドアのときは、ジャージが動きやすいからそうしたい。みんなと合わせなくていい。」
②「窯があるみたいだし、ピザにしようよ。」
③「なんでもいいよ。」

メモ

授業の感想

児童の振り返りシートから

「僕がいた班では、初め多数決でした。他の班もそうでしたが、いろいろな方法を見つけていくうちに意見が増えました。最後は全ての意見を混ぜるなどの考えも出ました。これからは一人一人の意見を大切にしていきたいです。」

「話し合うことがだんだん難しくなって行って、周りの人の意見と食い違っていくことを感じました。みんなにとって良いものにするために、みんなの意見の間を取ったり、意見を混ぜたりすると良いと感じました。」

■実践例2)

教科：学級活動 対象：小学校4年生

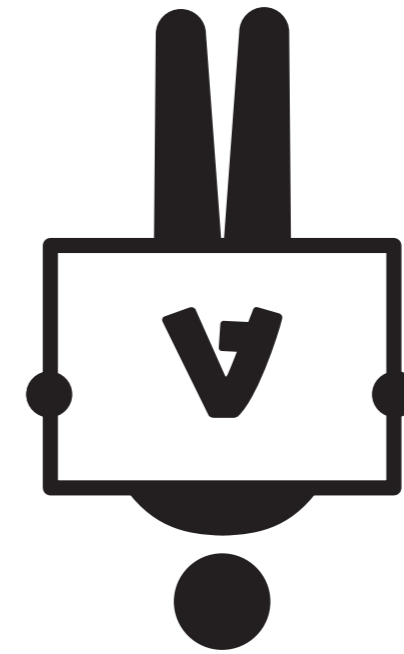
導入	<p>「日本と世界には、食べ物の違い(例えば日本人はよくお寿司を食べるけどインドではカレーを食べる)や使っている言葉の違いがありますね。」</p> <p>「日本人同士ではどうですか…。例えば、好きな食べ物の違い、したい遊びの違いがそれぞれありますね。」</p> <p>「それぞれの考えがある中でどうしたらみんなが納得して、気持ちよく過ごせるかを学習します。」</p> <p>「今日は、キャンプの計画をするよイエーイ」</p> <p>「キャンプに行くぞ、えいえいおー!!」</p> <p>「その中でキャンプ場にある、すごくおいしく焼ける窯を使ってピザを焼くことと、みんなでの遊びを決めましょう。」</p> <p>「より良いキャンプになるようにグループの全員が納得できるように決めましょう。」</p> <p>「今日のめあてはグループの全員が納得できるように決めようです。」</p>
話し合いのルール・場面設定の説明	<p>「① 全員で焼くピザの味を決めます。」</p> <p>「② みんなでする遊びを決めます。(遊ぶ時間は10分なので、1つの遊びに決めてください。)」</p>
話し合いの開始～終了	<p>「今回は話し合う学習なので、『役割カード』を配ります。配られたら、こっそり見てね。」</p> <p>「それは、初めの自分の気持ちになります。ただし、友達の考えを聞いて変わったら変えてもいいです。大事なのは、全員が納得して決めることです。話し合う時間は5分です。ではどうぞ。」</p>
ターンごとに話し合いのふりかえりをする	<p>『「ピザの味」はどのように決めましたか。』</p> <p>・明太マヨ ・シーフード ・パン ・シーフード明太 ・ハーフ</p> <p>「決め方の方法のこつは何でしたか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> それぞれの良さを混ぜる。 納得のできる理由を言う。 先に考えを出してから比べて結論を出す。 今回は〇〇だけど、次回は△△と条件を付ける。 全員が納得の上、ジャンケン・多数決をする。 それぞれの良さを混ぜる。
ふりかえり	<p>「今日の学習で分かったことと、今後どうしていきたいかをワークシートに書きましよう。(個人のふりかえり)」</p> <p>「どんなことを書きましたか。(全体共有)」</p> <ul style="list-style-type: none"> みんなの意見を大切にすることが大事。それぞれのいいところを見つけて、悪いところが無かったり、同じだったりしたらよりよい遊びを作る方法もある。 意見を出し合って、混ぜたり、良い理由を出し合ったりすれば納得してくれる。 どうしても決まらない時は、お互いが納得した上なら、ジャンケンを取る方法もある。 みんなの気持ちを意見に入れることが大切。 <p>「今日学んだことを活かして行ってね!」</p>

(実際の振り返りで児童から出たコメント)

「リーダー的なまとめ役みたいな役割がいて助かった。逆にいないと困ったと思う。」

「他のグループの人とも話し合ってみよう」

「多数決になってしまった」



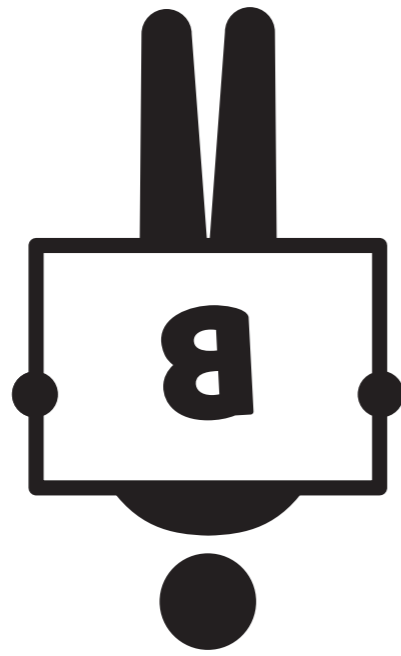
山折り

5分でグループの全員が納得できるように決めましょう!

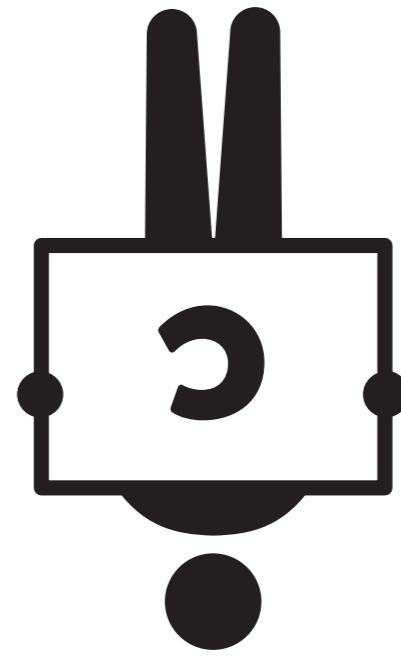
**初めの気持ちが書いてあります。
ただし、友達の考えを聞いて変えてもいいです。**

A

初めの気持ち	わけの例
①シーフードピザ味がいい。	「エビのプリプリ感が好き。」 「貝がしょっぱくておいしい。」
②川遊びをしたい。	「キャンプならではの遊び。」 「リフレッシュできる。」



山折り



山折り

5分でグループの全員が納得できるように決めましょう！

初めの気持ちを書いてあります。
ただし、友達の考えを聞いて変えてもいいです。

B

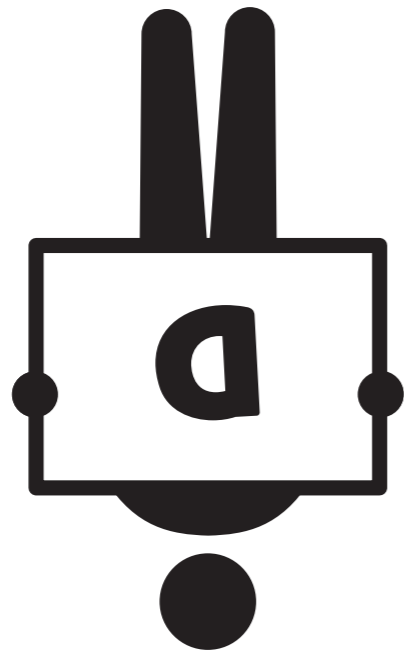
初めの気持ち	わけの例
①シーフードピザ味がいい。	「エビやイカの食感が好き。」 「海鮮は体にいい。」
②鬼ごっこをしたい。	「広い自然の中で走ったら、気持ちいい。」 「隠れる場所がある。」

5分でグループの全員が納得できるように決めましょう！

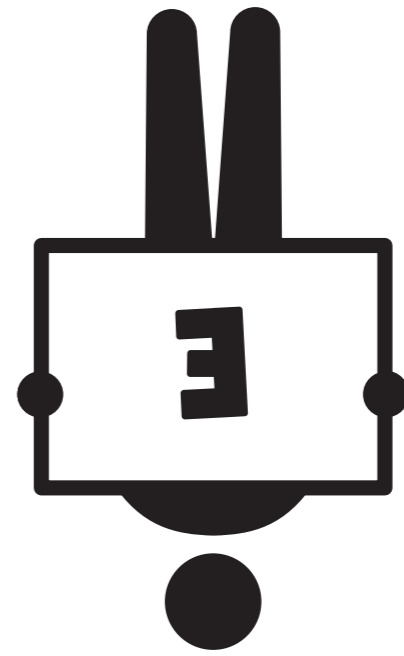
初めの気持ちを書いてあります。
ただし、友達の考えを聞いて変えてもいいです。

C

初めの気持ち	わけの例
①明太マヨ味がいい。	「明太子の味が好き。」 「ピンク色でかわいい。」
②鬼ごっこをしたい。	「広い場所で走りたい」



山折り



山折り

5分でグループの全員が納得できるように決めましょう！

初めの気持ちを書いてあります。
ただし、友達の考えを聞いて変えてもいいです。

D

初めの気持ち	わけの例
① 明太マヨ味がいい。	「しょっぱくておいしい。」 「明太子とマヨネーズの相性がいい。」
② 川遊びをしたい。	「生き物がいる。」 「暑い体を冷やせる。」

5分でグループの全員が納得できるように決めましょう！

初めの気持ちを書いてあります。
ただし、友達の考えを聞いて変えてもいいです。

E

初めの気持ち	わけの例
① ピザの味に強いこだわりはない。	「ピザは何味でもよい。」
② 鬼ごっこをしたい。	「自然の空気が気持ちいい」

グループの全員が納得できるように決めましょう

名前

○分かったこと

○今後活かしていきたいこと

YOKOSO JAPAN

はじめに

私たちは、「多文化共生」というテーマのもと、このワークショップを試行錯誤しながら作成しました。

このワークショップで私たちが伝えたいことは「多様性を実感する・知る」ということです。研修中、対話の中でお互いを理解、共感、発見することが大切であること、また多様性について知り、それを児童・生徒達へ伝えたいと考えました。

ワークショップの内容は、人が生きるのに不可欠な「食」をトピックに選びました。今年日本で開催されるオリンピックを取り入れるのもタイムリーだと考えています。「食」から、世界を見つめて多文化共生を知り、考えるきっかけ作りになると良いと思います。

ワークショップのねらい

- ① 多文化共生の理解の入り口として、まず色々な人がいることを知ること
- ② 自分とは違う人と話し合う難しさ、楽しさを知ること
- ③ 身近な「食」を通して、多様性を実感すること

概要

プロフィールカードを引き、その役割を演じながら、グループで話し合う。プロフィールカードには、ベジタリアン、イスラム教徒など食事に関する制限が指定されているので、それをふまえてみんなで楽しく食事に行くにはどうすればよいか考えながら話し合いを進めていく。

教材内容

解説書

- お店カード6種類
(シーフードレストラン・カレー屋・寿司屋・とんこつラーメン屋・焼肉屋・パンケーキ屋)
- プロフィールカード8種類
(ベジタリアンの人・牛乳/魚アレルギーの人・豚肉を食べない人・生魚を食べない人・日本語が読めない人・英語が読めない人・はしが使えない人・グルテンフリーの人)
- ヒントカード1枚

所要時間	30～45分	準備するもの	お店の写真カード(グループ分) プロフィールカード各人1枚 ヒントカード(グループ分)
1グループの人数	4名～		

進め方

<p>導入</p>	<p>世界地図を見て、様々な国の人々が日本に来ることを知らせる。</p> <p>教師の発話(例) 「今年は、オリンピックが開催されますね。 たくさんの人々が海外から日本にやってきましたね。」</p>
<p>お店カード紹介</p>	<p>6種類のお店を紹介する。 (シーフードレストラン・カレー屋・寿司屋・とんこつラーメン屋・焼肉屋・パンケーキ屋) お店には、独自におすすめポイントがあることを知らせる。 ☆デモンストレーションがあっても良い。</p> <div data-bbox="430 598 1216 829" style="text-align: center;"> </div> <p>話し合いをして、みんなで楽しく食事に行くために1つの店を選ぶように指示する。</p>
<p>プロフィールカード紹介</p>	<p>プロフィールカードの説明をする。</p> <div data-bbox="430 1050 845 1291" style="text-align: center;"> </div> <p>ルール説明</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手にカードを見せない 相手に役割を伝えない。 分かるように、指さしをしない。 <p>4人グループになる。 プロフィールカードを1人1枚配る。 書かれた内容を読んで、役割を理解する。</p>
<p>グループワーク話し合い</p>	<p>グループで話し合う(5~10分) 困ったときはヒントカードを見ることができる。 話し合いの内容(例) 「〇〇のお店にいきませんか?」 「わたしは、〇〇のお店に行ってみたいな。」 「みんなが、行ける店はどこなのだろうか?」 「〇〇の店に行けそうだね。」</p>

<p>ふりかえり</p>	<p>「ワークショップのねらい」を意識して、振り返りを行う。 ふりかえりカードを配る。</p> <div data-bbox="1944 220 2329 577" style="text-align: center;"> </div> <p>①②③個人で記入する。</p> <p>③まで記入したら、一斉にプロフィールカードをグループで見せ合う。 気が付いたことを、グループで話し合う。(自然と話し始めるとよい) 全体で、グループごとに発表する。 ④⑤個人で記入する。</p>
--------------	--

☆実物教材を使用することも可能です。
☆発達段階の違いに応じて、アクティビティを変更する事も可能です。
☆音楽なども使用して雰囲気づくりをすることも良いでしょう。

出典
かわいいフリー素材集いらすとや <https://www.irasutoya.com/>
須藤 健一『それ日本と逆!?文化のちがいが習慣のちがいが1) モグモグ食事のマナー』学研教育出版、2012
須藤 健一『それ日本と逆!?文化のちがいが習慣のちがいが2) パクパク料理と食べ物』学研教育出版、2012

JICA 横浜ホームページには、本書のPDF版が掲載されていますので、カードなどを印刷することができます。

ヒントカード

どう伝えればいいか迷った時の…

ヒントカード

① 最初に提案した店と違う店を提案する

再提案

② 好きな食べ物いつも食べている物を聞いてみる

③ いつも食べているものを聞いてみる

質問

④ 食べられないもの、食べ物以外の困りごとはないか考えてみる。

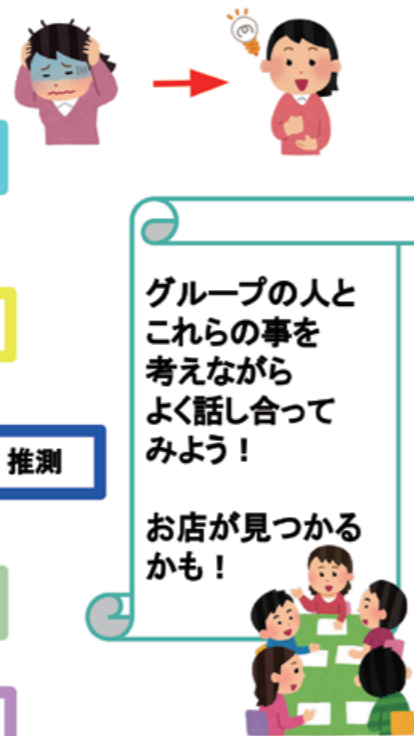
推測

⑤ 言い出しにくい思いをしている人がいないかよく考えてみる

想像

⑥ 相手が言いやすいような言葉かけ

声かけ



プロフィールカード

例

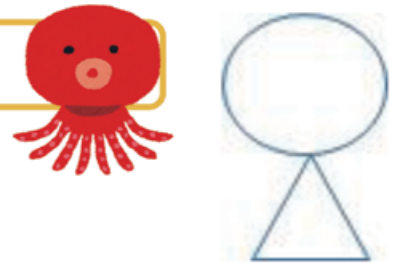
あなたは タコを食べられない 人です。

☆あなたの国ではタコを食べません。

NGワード(言ってはいけないことば)

タコはたべない。

アメリカ人の中には、タコを「デビルフィッシュ」といい、食べない人もいます。
北ヨーロッパの人々はタコを怪物とみなして嫌います。



あなたは ベジタリアン の人です。

☆肉や魚は食べません。

☆野菜、イモ類、豆類などが食べられます。

NGワード(言ってはいけないことば)

ベジタリアン

野菜

肉・魚は食べない

オーストラリアでは10人に1人、ドイツではそれ以上の割合でベジタリアンの人がいるよ。



あなたは 豚肉を食べない 人です。

☆イスラム教やユダヤ教では、豚肉を食べることが禁止されています。

☆それ以外の牛肉・鶏肉などは食べられます。

☆豚肉のエキスが入ったスープやスナック菓子など豚に関する食品は全て食べられません。

NGワード(言ってはいけないことば)

豚肉は食べない

イスラム教の聖典「コーラン」で豚肉が禁止されているんだ。どこでも平気で寝転んだり、育てるのに大量の水を必要としたり、排せつ物も含めてなんでも食べる豚は汚いものとされているよ。



あなたは 牛乳・魚アレルギー の人です。

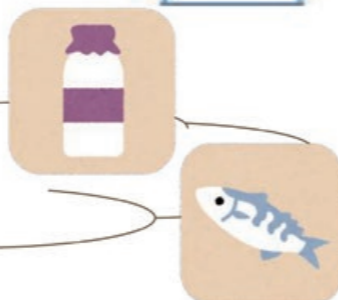
☆牛乳と生魚・焼魚すべて、アレルギーがあるので食べません。

☆それ以外の肉などは食べられます。

NGワード(言ってはいけないことば)

牛乳・魚は食べない

世界の30~40%の人が1つ以上のアレルギーを持っているんだって。



あなたは 生魚を食べない 人です。

☆あなたの国では生の魚を食べる文化がありません。

NGワード(言ってはいけないことば)

生魚は食べない

フランスでは、複雑な味のソースをおいしく作ることが料理人の腕の見せどころと考えているため、火を通さない魚は料理ではないと考えられています。



あなたは 日本語が読めない 人です。

- ☆あなたは日本に来たばかりです。
- ☆日本語が読めないので、日本語以外の言葉を表す店にしか行けません。
- ☆話し合いの時は日本語をはなしていいよ。



NGワード(言ってはいけないことば)

日本語は読めない。

日本政府は、日本を訪れる外国人を、
2030年には6,000万人とすることを目標に掲げています。



あなたは はしが使えない 人です。

- ☆あなたは、はしが使えません。
- ☆はしを使わない店にしか行けません。



NGワード(言ってはいけないことば)

はしは使えない。

インドでは、神様からいただいた食事に道具を使うのは失礼だと考えられているんだって。

あなたは 英語が読めない 人です。



- ☆あなたは英語が読めません。
- ☆英語が読めないので、英語以外の言葉を表す店にしか行けません。
- ☆話し合いの時は日本語をはなしていいよ。



NGワード(言ってはいけないことば)

英語は読めない。

日本政府は、日本を訪れる外国人を、
2030年には6,000万人とすることを目標に掲げています。

あなたは グルテンフリー の人です。

- ☆あなたは、小麦粉(グルテン)を使った料理は食べられません。



NGワード(言ってはいけないことば)

小麦粉

世界では、美容や健康のために、小麦粉をとらない人が年々増えています。

★えっ！これにも？！見た目ではわからない小麦製品
・調味料(醤油・お酢) / 飲み物(ビール・麦茶)
カレーやシチューのルー



お店のメニュー

寿司屋

特上寿司
¥2000



お手頃寿司
¥1000



巻物セット
¥800



どのセットにも新鮮な生魚が含まれます！！

Seafood Restaurant

Assorted seafood rice bowl
¥800

-A bowl of rice with sashimi on top.



Tuna Sashimi Rice Bowl
¥800

-Served with homemade sesame sauce



Bara chirashi don
¥800

-rice topped with sashimi and other ingredients



カレー屋 / Curry Restaurant / करी

ポークカレー - ¥800
(Pork curry / पोक करी)



ライス・ナン(小麦100%)は選べます。

You can choose rice or naan.

आप चावल या नान चुन सकते हैं।



ラーメン屋

味付き卵入りラーメン
¥600



昔ながらのとんこつラーメン
¥750



もやしたっぷりラーメン
¥700



どのラーメンもじっくり豚骨スープで煮込んであります。
店長のこだわり！おはしで食べてね！ 麺は北海道産小麦100%！

Pancake cafe

Strawberry
Whipped Cream
Pancake
¥1000

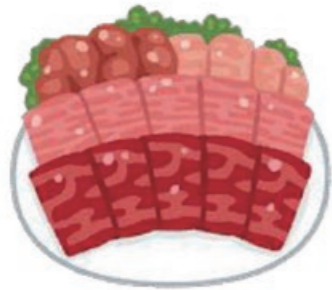


Original Pancake
¥800



焼肉屋

上焼肉5種盛り合わせ
¥2980



カルビ・ハラミセット
¥1980



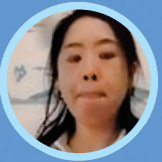
豚トロ
¥1200



教員に伝えたい！ (ワークショップづくり、実践などについて)



秋山 尚子



なぜワークショップをするのだろうか？と、ふと考えることがあります。でも、ワークショップは、通常の授業では見えない生徒の表情や考えに触れる機会になります。また、ワークショップを作成する過程とその実践のなかで、なにより自分自身が一番あれこれ考えます。その考えて悩んだ分だけ、ワークショップを通して生徒と共に考えることはとても楽しいです。そして、自分が想像していなかった世界に連れていってくれます。

岩藤 仁美



お互いの納得がいくようにグループで決めるにはどのような方法があるか考えました。「食べ物」と「遊び」を決める際、様々な決め方の方法があることに児童は気付きました。納得がいくように決めるには、「全員が納得の上、多数決をする。」「相手が納得のできるわけを言う。」「お互いの良さを入れた案を出す」などの考えが生まれました。方法を知っておくことは、相手と関係を気付いていく上で大切だと感じています。

梶 奈穂子



本研修ではたくさんのワークショップの実践をさせていただきました。改めて、ワークショップは楽しいと思いました。そしてワークショップづくりはもっと楽しいと思いました。授業時間数や試験範囲など、教えなければならない内容が多く焦りを感じる毎日ですが、たまには時間をかけて児童・生徒が声に出し、体を動かし、自ら考えるワークショップをすることで、何かを残していける時間を提供したいものです。

兼岡 里衣



- 「何のために」が一番大事
- 教え込まないで生徒から引き出そう(誘導×)

佐々木 明



普段行っている授業の振り返りをするのは皆さんも行っていることと思います。ワークショップづくりや今回の実践を行うと、振り返りの幅がより一層広がることと思います。ワークショップには、同じ意識で取り組んでいる方がたくさんいます。時には意見が異なる部分もありますが、その時こそ多文化共生です。そこからどう考えていくかがとても楽しく、興味深いです。

武士 勝広



「多文化共生って何か。」など、一人一人が疑問をもっていることを基にして、実践したことを伝えたいです。校種別の教師が共に、知恵、経験、学んだことを試行錯誤しながら、作る、壊す、を繰り返しながらしてきたので、是非、教員の方々に児童・生徒に適した学びにアレンジして使ってほしいです。実践して何かしら気づいたことを、目の前の子どもたちの視野を広げてください。

寺鍛冶 尚紀



授業が「一方的な知識伝達」で終わってしまうと、生徒が自ら気づき学ぶ機会は生まれません。「参画型・協働型」の活動を授業の中でしかけると、主体的で対話的な学びが自然に生まれます。そこでの教師の役割は「決まった正解を教え込む人」ではなく「正解がない問いを参加者と一緒に考える人」です。生徒ともに考え悩み、協働して課題解決が達成できれば、授業はより楽しく生まれ変わります。皆でともに悩み、考えていきましょう！

中川 飛鳥



授業実践から、「WSは生き物だ」と感じました。勤務校では自分以外に英語や家庭科の先生も、各々の想いでねらいや手順をアレンジしてWSを実践して下さいました。毎回生徒の反応や気づきが違い、日々新しいものが生まれ、ワクワクしました。WSは一度作って終わりではなく、その時間内で児童生徒や先生方の味が出るのが面白みだと思います。難しそう、ではなく迷ったらまず実践し実情にあった自分らしいWSを作ってみて下さい！

中塚 圭二郎



現実の問題をひたすら抽象化していくと、いろいろな問題を包括するようなワークショップになります。今回はほとんどワークショップを作っていた状態でした。今回の経験から具体的な問題をそのまま扱うより、抽象化したワークショップから生徒に考えさせると、実際の問題に還元される以上の学びがあるようです。個人でする学びよりも共同学習で大きな価値のある活動になりそうです。

藤井 智矩



子どもたちが本当に楽しめるものをつくるためには「スクラップ&ビルド」が大事だと感じました。ワークショップづくりをするときは教師である自分も楽しめるように「子どもも本気になれる」ことを意識するとともに、様々な環境でもできるように「汎用性」を考えながらつくりました。また、実践するときには子どもたちの多くの「気づき」を引き出せるようにファシリテーションを意識しながら進めることが大切だと感じました。

Let's 体で表現!

How can we live together ?

ワークショップのねらい

1. マイノリティの存在に気づく。
2. マイノリティが排除されがちな社会で、自身の立場を受け入れ、多様な人々と共生する世界を考える機会にする。
3. 多文化共生を実現のために自分には何ができるのかを考えるきっかけにする。

概要

「みんな違ってみんないい」は「多文化共生」なのか。言葉の裏に「関係ない」「興味がない」が隠れていないか。多文化を知るだけにとどまらず、どのようなあり方が「多文化共生」に繋がるのかに目を向けるワークショップを目指した。特に、見落とされがちなマイノリティに着目した。

所要時間	45～50分 を2回	教材・ 準備するもの	①図形カード(各グループ1枚、 内容はグループによって異なる) ②グループのふりかえりシート (Behavior Reflectionシート) ③個人のふりかえりシート ④進行用の図形スライド(○、△、□) ⑤PC、プロジェクター
1グループの人数	4～5人		

進め方

■ 1時間目

活動	ファシリテーターと参加者の行動
アイスブレイキング アクティビティ	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターは参加者を4～5人グループで座らせる。 ・体を動かして楽しめるアクティビティ
ルール説明	<ul style="list-style-type: none"> ・図形カードに書かれてあることを覚え、カード見なくても記号のみで動けるようにグループで練習する。その際、グループでお互いの目を見て動けるようにする。 ・練習時間は2分程度とする。 ・図形カードを各グループに1枚、配布する。
活動① オリジナルグループ	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターは図形カードを裏返しにするように指示する。 ・進行用の図形スライドをテンポ良く10回くらい見せる。(ランダムに図形が表示される) ・参加者はスライドに合わせて、グループでお互いの目を見て動く。
説明	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループから1人だけ隣のグループに移動させる。(マイノリティを意図的に作る。)
活動② シャッフルグループ	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターは進行用の図形スライドを表示し、先ほどと同じように動くように指示する。 ・参加者の戸惑いがあるかもしれないがテンポよく繰り返す。(動きが合わない、反対に合わせる、教えあったり、笑ったり、微妙な空気だったり、それぞれの活動になる。)

グループの ふりかえりシート 記入	<ul style="list-style-type: none"> ・グループのふりかえりシート(Behavior Reflectionシート)を配布する。 ・シャッフルグループでの活動の振り返りをさせる。 ・説明をした上で、Behavior Reflection①、②、③の全ての記入をさせる。(①、②まで書かせて、全体を見てから③を書かせるなどアレンジもできる。)
対話	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターは①から順に各グループにどんな回答になったか聞いていく。 ・動きを変えた理由、周りに合わせる合わせないの判断の決め方など、対話を通じて考えを深める。 ・どうしてこのような行動変容になったのかを考えさせる。マイノリティに対する無意識の価値観を言語化し、参加者自身が無意識に持っていた自分自身の価値観を認識させる。
個人の ふりかえり 記入	<ul style="list-style-type: none"> ・個人のふりかえりシート配布し、本日のワークショップで何を感じたかななどを記入させる。 ・個人のふりかえりシートとグループのふりかえりシート(Behavior Reflection)を回収する。

■ 2時間目

活動	ファシリテーターと参加者の行動
個人の ふりかえりを 共有	<ul style="list-style-type: none"> ・開始前にシャッフルグループで予め座ってもらおう。 ・前回の振り返りをするために、個人のふりかえりシートとBehavior Reflectionを返却する。 ・予めピックアップした個人のコメントのスライドを表示する。 ・興味深い意見を紹介する。
対話① グループの取った 行動のふりかえり	<ul style="list-style-type: none"> ・以下の4つの大まかな結果を表示し、各グループで1～4のどの結果に最も近いか考えさせる。 <ol style="list-style-type: none"> 1. グループ内全員の動きは合わなかった ⇒折り目ただしくん集団 2. 動きが合った(新たな1人が、元々いた3人に揃えた) ⇒長い物には巻かれる集団 3. 動きが合った(元々いた3人が、新たな1人に揃えた) ⇒ネズミに噛まれた猫集団 4. 動きが合った(元々いた3人と、新たな1人の動きをそれぞれ合わせた) ⇒優柔不断集団 ・それぞれの良いところと良くないところを探る。
グループの 結果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・グループでBehavior Reflectionの④を記入させる。 ・自分たちの最終的なグループの動きの結果のいい点・欠点、疑問点を書かせる。また、他の結果のいい点、悪い点も書かせる。各グループを回って記入を促す。
対話③ 主観的視点から 客観的視点へ	<ul style="list-style-type: none"> ・4つ結果のどれも正解ではないことダイアログを通じて参加者と共有する。 ・この状況は現実のどの状況に似ているか、関係しているかを引き出す。 ・興味深い言葉を拾って、掘り下げて対話を進める。
個人の ふりかえり	<ul style="list-style-type: none"> ・個人のふりかえりシートを配布する。 ・参加者に、思いもよらなかった意見や考え、それに対してどう感じたか(納得した、異論がある、など)を書いてもらう。率直に何を感じたかななどを記入してもらう。

① 図形カードの例 (各グループ1枚、内容はグループによって異なるもの)

<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=バイバイ △=腰をフリフリ □=ピアノを弾く</p> <p style="text-align: right;">1</p>	<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=ピアノを弾く △=バイバイ □=腰をフリフリ</p> <p style="text-align: right;">2</p>
<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=腰をフリフリ △=ピアノを弾く □=バイバイ</p> <p style="text-align: right;">3</p>	<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=太鼓 △=オニ(鬼)のつの □=ウェーブ</p> <p style="text-align: right;">4</p>
<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=ウェーブ △=太鼓 □=オニ(鬼)のつの</p> <p style="text-align: right;">5</p>	<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=オニ(鬼)のつの △=ウェーブ □=太鼓</p> <p style="text-align: right;">6</p>
<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=ハワイアのフラダンス △=ボクシング □=両手でバツ(×)</p> <p style="text-align: right;">7</p>	<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=両手でバツ(×) △=ハワイアのフラダンス □=ボクシング</p> <p style="text-align: right;">8</p>
<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=ボクシング △=両手でバツ(×) □=ニンジャ</p> <p style="text-align: right;">9</p>	<p>前に表示される図形は以下を表しています。 図形が意味する動作をしてください。</p> <p>○=両手でピース △=ウサギの耳 □=ハワイアのフラダンス</p> <p style="text-align: right;">10</p>

② グループのふりかえりシート (Behavior Reflection シート)

Behavior Reflection

グループ 全員の名前: _____

① たどり着いた結果(4回目での、最終的なグループの動き)

② 1回目から4回目までの行動(どんなことがあったのか)

③「1回目から4回目まで自分の動きを変えた? 変えなかった?

少しでも変えた場合はYes. Yes/No」

「なぜ?」(1人ずつ答えてください)

Name		Name	
Yes/No		Yes/No	
Reason		Reason	

Name		Name	
Yes/No		Yes/No	
Reason		Reason	

Name		Name	
Yes/No		Yes/No	
Reason		Reason	

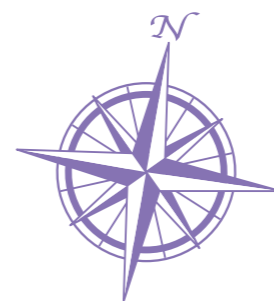
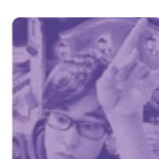
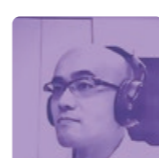
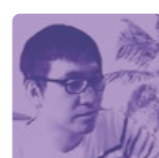
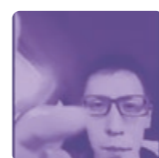
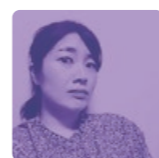
グループのふりかえりシート (Behavior Reflection シート)

Behavior Reflection

グループ 全員の名前： _____

④ 自分たちの最終的なグループの動きの結果： _____ (番号)

良い点	悪い点・疑問に思った点



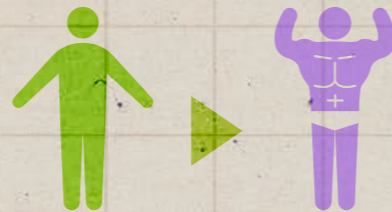
- ▶ P58 本研修参加前と後のご自身の変化
- ▶ P60 本研修からの最大の収穫は？
- ▶ P62 本研修に参加した感想
- ▶ P64 授業実践を経て、学習者(児童・生徒)の変化、反応



本研修参加前と後のご自身の変化

秋山 尚子

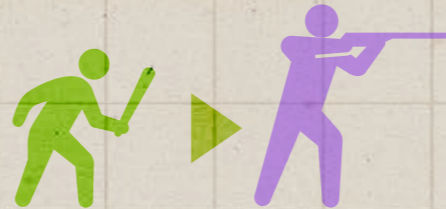
研修の度に深く考えさせられたこの研修は、自分や周りとつながることや自分自身を再考する機会となりました。自分の中に得た、新たな視点や価値観をこれからはさらに深めていきたいと思っています。



岩藤 仁美

私達が「当たり前」に使っている言葉が、外国籍児童に対して、伝わるものかを吟味するようになりました。例えば、国語の授業で文章を扱うときに、日本人がすっと理解できることでも、外国籍児童には文化的な背景を踏まえて説明をする必要があることもあります。どこまで知っているかを考えながら、児童と接しています。

また、日本のルールを基盤にするのではなく、児童の背景を踏まえて個性を大事にするように心がけています。



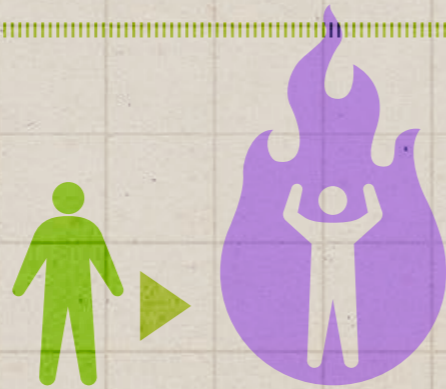
梶 奈穂子

私自身の変化としては、色々な意味で視野が広がったと感じています。SDGsについて一から学ばせていただいたこと、多文化共生については日系人の方のお話や鶴見でのフィールドワークで生の声を聴き、多文化共生がもたらす人の豊かさを考えることができたり。多くの経験をさせていただく中で、視野が広がりもっと知りたいという気持ちが強くなったと思います。



兼岡 里衣

・「みんな違ってみんないい」の先へ
「みんな違ってみんないい」の裏に「興味がない、関係ない」が隠れてはいないでしょうか。「日系人は日系人で集まり、日本人は日本人で集まる」という話を聞き「みんな違ってみんないい」と認め、排除していない状態だけでは不十分だと考えました。多文化がお互いにふれあって、わかり合ったり、分かち合ったりして、未来を創造していくことが多文化共生だと考えるようになりました。



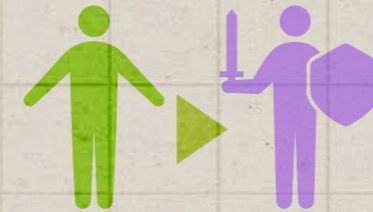
佐々木 明

今年度は、社会的状況を考えて、研修を実施すること自体が難しいのかと思っていましたが、そのなかでどのような研修があるのか、できるのか未知の世界でした。そのなかで、横浜にしながら、多文化共生や移住者を取り巻く環境について、身近なところや意外な面から迫る研修は、私にとって新鮮かつ新たな視野を広げることにつながるよい機会となりました。



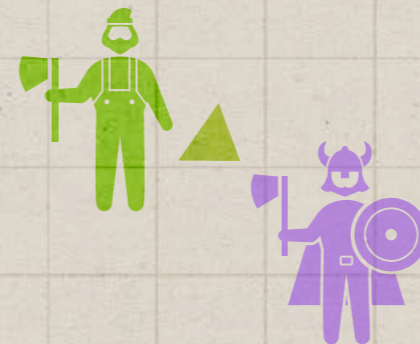
研修に参加して、現状を知るなど様々なことについて学ぶことができました。大きなテーマ「多文化共生～困難を豊かさに変えるプロセス～」ということを考え続けることができました。また、個々の文化がそれぞれあること、違いに目を向けて相手を尊重することの意味を理解することができまし、様々な経験を通して、思考のツールを増やすことができました。

武士 勝広



「教師は無意識的に、決まった答えを教えようとしている」ことに気づかされました。ワークショップのアイデアをグループで出し合っているときは無自覚でしたが、JICA 横浜でワークショップを実演したとき、参加者からの「教師の側でゴールを決めている」という指摘にハッとしました。決まったレールに載せるのではなく、参加者自らがレールを作れるようにサポートすることこそファシリテーターの役割だと学びました。

寺鍛治 尚紀



本研修に参加することで、自分自身を見つめ直すきっかけになったように感じます。自分で思っていたよりも、自分のこだわりが強く、他を容認しない、自ら人をこの人はこういう人だと少しの情報から決めつけてしまう面があったように感じました。また、ワークショップ作りを通して、1つの答えを求めたくなる所や、目的より方法を優先して考えてしまうところがあったと思います。

- ・人と「対話」しながら違いを楽しむこと
 - ・「これを通して何を伝えたいのか」という「目的」を常に考える。
- この研修で印象的だった上記二点を忘れず、今後活かしていきたいと思っています。

中川 飛鳥



日系人を中心に「正規の教育」で取りこぼされている人がいるのではないかと気がなり始めた。今回インタビューをしたのはすべて困難を「乗り越えられた」方々で、顧みられない人たちはどこに行くのだろうと考えた。乗り越えるための援助と並行して、困難を抱えている人を探す努力もしなければならないと感じた。

中塚 圭一郎



1つ目は、「お互いの思いを前向きに受け止める」ことをより意識するようになったことです。自分自身が意識するようになったことで、ワークショップづくりや日頃の児童との接し方にも活かすことができました。2つ目は、「ファシリテーション」についてです。研修で学んだことを基に、教師の伝えたい思いだけでなく、子どもたちと一緒に考え、気付きをたくさん出すことがよりよい学びにつながることを考えるようになりました。

藤井 智矩



本研修からの最大の収穫は？



秋山 尚子

様々な校種の先生方との出会いと、自分の知らなかった事や新しい視点を共有できることが大きかったです！



岩藤 仁美

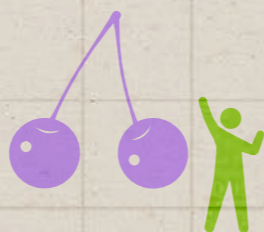
「困難」を「豊かさ」に変えるプロセスをテーマに研修を行う中で、実際の学校現場の現状と理想を共有した後、どのように「豊かさ」に変えることができるかを話す場面や、実際にフィードワークでどのような課題や解決方法があるかを聞くことができました。

それらの経験を踏まえワークショップ作りをすることで、児童に何を気付かせたいかを考えることができました。



梶 奈穂子

本研修は、ワークショップづくりなど、最終的には他の参加者の方々と協力してひとつの目標に向かっていくというものでした。他の方と意見を出しながら協力して、1つのものをつくり出すということが楽しい(大変な)ことなんだということを私は忘れかけてしまっていたと思います。本研修では知識や経験を得られたことはもちろんですが、それを再発見・再確認できたことが私にとって最大の収穫だったと思います。



兼岡 里衣

- ・日系人の方の話を直接聞けたこと
アイデンティティの確立についての話を聞いて、日系の方の気持ちを知ることができました。
- ・マイノリティ体験ができたこと
ワークショップで自分だけ意見が違うととても言い出しにくかったです。
- ・ファシリテーションについて学べたこと
スキル習得には至っていませんが、改善点がわかりました。



佐々木 明

「海外に行かなくても、今、自分がいる場所で感じられる「多文化共生」です。私は横浜に転動してきて、7年目でしたが今回の研修を通して、新たな横浜の多文化共生の魅力について知ることができました。もともと国際色が豊かな横浜の街ですが、そこには私の知らない、「多文化共生」の世界がありました。「多文化共生」を考えるには、様々なキーワードやテーマが存在しますが、一つに絞るといっても、いろいろな視点から「多文化共生」を考えることができました。



他校種の教員と共に、1つの目標に向かって取り組めたことが大きな収穫です。校種が変われば、児童生徒の発達段階が違います。完成させるために、お互いに協力し、使命をもち取り組めました。より良いものを築き上げるために、ゴールに向かって進めることができましたし、周囲からのフィードバックが大きな成長につながりました。

武士 勝広



鶴見国際ラウンジで聞いた講演の中での、「先生の眼差しが俺を頑張らせてくれた」と生徒から言われたという話が一番心に刺さりました。生徒を受け入れること、承認するために必要なのは、どんな言葉かけよりも、「視線を送り続ける」ことだと気づかされ、目から鱗でした。以降、前で話す時は、より意識的に生徒に目を合わせるようになったと思います。

寺鍛治 尚紀



一度フィリピンの貧困地域の村へ行ったときに、ネットカフェのような場所でYoutubeを見たり携帯を持ってFacebookをしている人々を見て、驚きの反面、「貧困らしくしろよ」と思い、どこかに「貧困らしさ」を探している自分がいて、そこにもやもやし経験があります。

この時のことが、フィールドワーク先で実際に対話をして「意外と困っていないかもしれない」、と気づいたことで、今まで「困っている人」に何かを「してあげる」、「やってあげる」という考えが自分にあつたことに気付いたことです。ボランティア先でも、もっと現地の方と「対話」すべきだったし、これからも、教師として何かを「してあげる」のではなく「対話」をして「何が必要なか」児童生徒たちと一緒に考えていきたいです。

中川 飛鳥



教育というものが学校の授業だけではなく、地域や友人関係も含め多層的な場で行われていることを強く実感しました。大きな意味での教育の全容と、課題と、それを解決しようと取り組む団体のつながりが見え方が大きな収穫です。学校が担っているものは大きい反面、細やかなサポートには向いていないことも分かりました。学校は得意分野を把握して、家庭や地域の協力を最大限に得ることが必要だと感じました。

中塚 圭一郎



何よりも向上心をもった方々さんの仲間と出会えたことです。全員がこの研修をよりよくしたいという気持ちをもって臨んでいたことがよい刺激となり、毎回参加した後には充実感と次の日からのやる気に満ち溢れていました。特に、校種が違ったことでそれぞれの考え方や取り組み方が違うことはとても印象的で、視野が広がりました。そのおかげでワークショップも、このメンバーだからこそ考えられたよいものになったと感じています。

藤井 智矩

本研修に 参加した感想

秋山 尚子



ワークショップをつくる過程においては困難なことが多くありましたが、一人で考える時間では、じっくり考えることができました。みんなで考える時間ではワークショップがブラッシュアップされて、そこからたくさん学びました。

岩藤 仁美



実際にお話しをお伺いし、現地を訪れることは貴重な経験だと感じました。鶴見区には、日系人が築いてきたコミュニティがあり、お互いに協力しながら生きてきた暖かい雰囲気がありました。
今後、実際にインタビューや現地に行くことを大切にしたいです。

梶 奈穂子



本研修を実施し私たちを支えてくださった方々、ゲストや講師として参加してくださった方々、そして一緒に参加した他の先生方、皆さん本当に素敵な方々でした。研修の内容以外に皆さんお一人一人から学んだこともあったように思えます。8月から始まった研修は約半年間でしたが、最後の方私個人的には勝手に仲間意識も感じていました。研修を終えた今、もうJICA 横浜に通うことはないと思うのが少し寂しいです。

兼岡 里衣



- ・多文化共生は大変、難しい、モヤモヤ(自分の意見が通らないこともある)
- ・多文化共生は自分だけでは生み出せなかったものを生み出せる(最初の考えとは全然違うワークショップができました)
- ・ファシリテーションは難しい(教師の殻を破る、脱・教え込み、問いかけ大切に)

佐々木 明



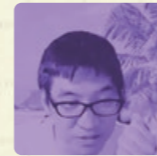
海外の研修に参加をしていれば、現地の人や現地の文化にもっと深く知ることができたかもしれません。でも今回の研修は違った視点から「多文化共生」を感じることができました。この研修を開催するにあたり、様々な点で配慮をくださったみなさん、私たちの研修を深めるために関わってくれたみなさん、そして「多文化共生」について研修でともに考えていった今回の参加者のみなさん、本当にありがとうございました。

武士 勝広



国内研修であったことで参加することができました。最初は、オンライン研修で始まり、参加される教員の皆さんは、視野が広く、意欲が高い方が多かったです。夏頃に、対面でさらに意欲が上がりました。自分の学びが、児童に伝えられる、誰かの役に立つことを信じて取り組んできました。ワークショップでは、様々な視点からフィードバック、助言を頂きました。大変充実した研修ができました。

寺鍛冶 尚紀



研修に参加して良かったことが2つあります。1つは「同じ志を持つ仲間との出会い」です。校種や所属もバラバラな10人が集まりましたが、議論を重ねながら共通の目標に向けて協働し続けたことで、かけがえのない絆が生まれました。また、2つ目は、高度な専門性を持たれた講師の先生やファシリテーターの方がワークショップについて教えてくださったことです。「参加者が自ら気づき・学ぶ」手法を学びました。

中川 飛鳥



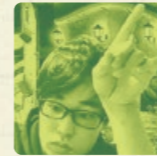
自分自身の気付きに加え、他の先生方とワークショップをつくる上で、人と何かをする難しさ、新鮮さを感じました。
主張だけをきいていると「どうしてそんな主張ばかりするのだろう」と思うことも、よくよく理由を聞いていくと、それなりの思いや理由があることを知りました。これも「対話」の重要性を感じた瞬間でした。外国の方、児童生徒と関わる時だけでなく、職員間でも同じだと感じました。

中塚 圭二郎



町の変化や人の変化と共に教育のニーズが変わっていることに気付きました。学習指導要領の変化を追うことは日々の業務でもありますが、町の歴史や変化を追うことはしません。コミュニティスクールなどという取り組みもあるので、学校がコミュニティに対してニーズを拾い上げる取り組みをするべきだと感じました。地域の力が弱まっていると言われている中、学校にはさらに求められる役割が増えそうです。

藤井 智矩



研修に関わってくださった方々すべてに「感謝」の気持ちでいっぱいです。今年度はたくさんの研修や学びの機会が減る中、精いっぱいのことをやっていただきとてもありがたく感じました。ただ、今回の研修で学んだこと、感じたことは決してここで終わらせるわけにはいきません。本当に大切なのはこれから「未来につなげていくこと」だと感じています。そのために、自分から「困難を豊かさに変える」未来をつくっていきます。

授業実践を経て、 学習者(児童・生徒)の変化、反応

秋山 尚子 生徒の事後アンケートでは、「ワークショップを行って自分なりに考えたことがあった」や「今まで気にしてなかったことに気付いたことがある」と回答した生徒が半数以上いました。このことから、ワークショップを通して、共に考え、モヤモヤするようなことに目を向け、疑問を持ってくれたのだと感じています。今すぐに生徒も私も変わりませんが、このモヤモヤを考え続け、この先のよりよい世界を共に創造できたら良いなと思います。



岩藤 仁美 児童からは、「意見を先に出してから、混ぜたりしてみんなが楽しく納得するように決めたい。」「色々な考えが出た時は、いいところを取って合わせたらいい。」「今後、学級活動で決め方の方法のこつを活かしていきたい。」などという振り返りが出ました。実際にお互いが気持ちよく納得して決める方法を考えることができたようです。今後どの場面で今回の授業で学んでいきたいかの記述もあり、生かしていけると良いと感じました。



梶 奈穂子 高校1年生15名に対して授業実践を行いました。最初は話し合う場面など戸惑っていましたが、基本的には楽しそうに取り組んでいました。今回のWSは多文化共生について考えるため、まず多様性について知ろうというものでした。イスラム教の方が豚肉を食べないなど、「そうなんだ!」などと興味を持ってカードを読む生徒もいました。話し合いも多様性の理解も、まずは少しずつ身近なところからやっていけるといいように思えます。



兼岡 里衣

- ①授業の結果 ・マイノリティがマジョリティに自然と合わせた
・「空気」「協調性」が、マイノリティをマジョリティに合わせさせる
- ②生徒の感想 ・他人に合わせるのも大切だけど自分の意見も大切に
・人と意見が食い違っても、その意見を否定しない
・みんなが思ったこと・感じたことをしっかりと伝えて、それを周りが認められるような環境が必要だと感じた
- ③今後 授業での気づきを日常での行動変容につなげていきたいです。



佐々木 明 総合的な学習の時間で、国際理解や環境、福祉をテーマに学習活動を進めてきました。その一環として音階にワークショップを用いた授業実践を行いました。最初はどのような授業なのか、子どもたちは興味津々でした。「何が起きるのか」「これは何を目的とした授業なのか」疑問に思い、素直に聞いてくる児童もいました。グループ活動の話合いでは、2つのクラスで異なる考えや答えも出て、クラスの実態によってアレンジを変えることもできると感じました。



武士 勝広 4、5年生のクラスで実践をしました。導入を工夫して、「やってみよう」と意識させました。話し合いでは、児童は自分の役割を意識して取り組んでいました。グループの様子を見ると、楽しんでいたり、困っていたりと、表情が豊かでした。感想には、「外国の文化を知ることができた。」「日本に来た人に案内をしてみたい。」など、様々な声がありました。



寺鍛冶 尚紀 私は今回のワークショップこそ実践していませんが、JICA 横浜が主催する開発教育関連のワークショップに参加するようになってから、参加型・体験型の活動を意識的に授業に取り入れるようになりました。生徒はより授業に主体的に取り組み、授業後の振り返りでも、質の高いコメントが生まれるようになりました。JICA 横浜で3年間、「参加者が自ら気づき・学ぶ」ワークショップのノウハウを学ばせていただきました。



中川 飛鳥 授業実践を経て、私が「一つの答え」を用意して「誘導」するような授業を行ってしまうと、生徒たちは「先生の模範解答」を探した答えをする、と感じました。それは私たちが日頃からそうさせてしまっているのかもしれない、と思いました。これからはできるだけ彼ら自身を表現する機会を作ったりお互いの考えをシェアする時間を作りたいです。そのことが、「Difference is beautiful」と考えられる社会を実現させる一歩かもしれないと思います。



中塚 圭二郎 マイノリティに対してどのように自分が反応するのか、無意識な判断を意識化するワークショップを行いました。この時期は国際女性デーの直後で、女性の社会進出に関するニュースの歴史を最近のものも含めて話題にしてみました。ある女子生徒からは、「これほど、無意識の差別を表現する言葉があるとは思わなかった。言葉ができる意識できるようになるので、無意識の判断を疑って言葉にしていきたい。」という発言がありました。



藤井 智矩 児童達は話し合いをまとめることは簡単ではないと感じながらも、どうすればよいかを考えるよききっかけになった様子でした。選択肢が増えれば増えるほどお互いの思いは違ってきても、全員が納得するようにすることが大切であることを実感していました。この実践を経たことで、児童間での話し合いを設けるとお互いの発言に対して「たしかに。」「それいいね。」というお互いを受け入れる発言が多く見られるようになりました。



ご協力いただいた皆様

- ・かながわ開発教育センター (K-DEC)
- ・小野行雄氏 (かながわ開発教育センター)
- ・石川一喜氏 (拓殖大学)
- ・公益財団法人海外日系人協会
- ・NPO 法人 ABC ジャパン
- ・公益財団法人横浜市国際交流協会 鶴見国際交流ラウンジ
- ・Yuri Shop
- ・Mahouri Miyazato 氏
- ・山本エメリン氏
- ・JICA 横浜教師海外研修過年度参加者の皆様

スタッフ

- ・JICA 横浜 石亀敬治
- ・JICA 横浜 中野貴之
- ・JICA 山梨デスク 穂坂ちひろ
- ・株式会社メディア総合研究所 (2020 年度運営事務局)



独立行政法人国際協力機構
横浜センター (JICA 横浜)

〒231-0001 横浜市中区新港2-3-1

Tel : 045-663-3220 (直通)

Fax : 045-663-3265

E-mail : yictpp@jica.go.jp

<https://www.jica.go.jp/yokohama/>



